ブレーク・タイム

ちょっとこぼれ話　XLVI

濵口　惠子

古代ギリシアの世界では、ありとあらゆるものに神が宿ると考えられていました。今回は、その中でも、ギリシア人の海外活動と大きく関わりのある、風の神について見てみましょう。

地中海の北東部に位置し、海に面したギリシアでは、大昔から航海が盛んに行われていました。紀元前8世紀から紀元前6世紀には、地中海沿岸、黒海沿岸各地に、ギリシア諸市の植民市が数多く建設されました。マッシリア（現マルセイユ）、ニカイア（現ニース）、ネアポリス（現ナポリ）、シュラークーサイ（現シラクサ）、ターレス（現ターラント）、ビザンチオン（現イスタンブール）、ミレトス等々、都市名を挙げると枚挙に暇がありません。

航海と言っても、古代ギリシア初期の大昔のことですから、船に櫂はあるものの、基本的には風頼りで、風が航海を左右しました。

紀元前7世紀頃に活躍した古代ギリシアのヘシオドスは、神話をまとめ、勤労の尊さを詠った詩人です。彼が書いた「労働と日々」（「仕事と日」とも訳されている）を紐解くと、「航海について」の記述の中で、「夏至も過ぎた後の50日の間」、遅くとも「新酒の季節まで」が航海に最適で、「船を壊すこともなければ、海難で命を落とすこともない」としています。6月から9月中旬にかけてが、最も条件が良い航海の季節ということでしょう。次に、春は、危険であるものの、機を見ての航海は可能で、あらゆる風が吹き荒れる初秋から晩秋にかけては、困難が伴うとしています。秋の終わりから春の初めまでは、北風が吹き荒び、海の事故が多発して非常に危険とされており、緊急時以外は、決して海に船を出しませんでした。

ギリシア人は、風にも名前を付け、崇めていました。

風神として上位にあるのが、曙の女神エーオースと、ティーターン親族の一人である星の神アストライオスとの間に生まれた4柱の神、北風の神ボレアース、西風の神ゼピュロス、南風の神ノトス、東風の神エウロスです。通常、これらの4人の男神は、翼を生やした姿をしていると考えられていました。

ボレアースは、冬をもたらす北風です。非常に荒々しく、強力で、4人の中で最も激しい神です。ヘシオドスの「神統記」では、「脚迅（はや）いボレアース」と述べられています。航海が盛んだったギリシアで、最も恐れられている風の神です。ギリシア北部トラキアのハイモス山の洞穴に住んでいると考えられていました。

それに対するものとして、西風の神ゼピュロスがあります。

ゼピュロスは、春の訪れを告げる優しい風です。前述の「神統記」では、「晴れ空もたらすゼピュロス」と形容されています。

泡から生まれた愛と美の女神のアプロディーテーを、まずはペロポネーソス半島の南沖のキュテーラ島に、次いで地中海の東に位置するキュプロス島へと大海原の上を運んだのが、西風の神ゼピュロスでした。

アポローンとヒュアキントスの仲を嫉妬したゼピュロスが、ほんのちょっとした出来心で、アポローンが投げた円盤の向きを変えたため、

はまぐち　けいこ：元 高槻赤十字病院職員

円盤に当たったヒュアキントスが亡くなるというエピソードもありました。

イタリアのフィレンツェのウフィツィ美術館にあるボッティチェリ作の「春」と「ヴィーナスの誕生」には、翼の生えたゼピュロスが描かれています。

ノトスは、暑さを運ぶ南風の神で、夏も終わりに近づくと吹き始めます。晩夏と秋の嵐を呼び、熱風で作物を台無しにしたり、疫病をもたらしたりする、農民から恐れられている風の神です。

東風の神エウロスは、暖気と乾燥、時には雨を運びます。今日のシロッコに該当します。エウロスについては、語られることも少なく、エピソードも大して残っていなかったことなどを考えると、さほど重要な神ではなかったと想像ができます。

ヘシオドスによれば、ノトス、ボレアース、ゼピュロスの3人の風神が、出自を神々に由来していて、死すべき身の者、つまり人間に有益で、その他の風は、いたずらに海の上を吹き荒れ、死すべき身の者の大きな禍いの因（もと）となるとされています。

以前、トロイア戦争の英雄であるオデュッセウスが、漂流の途中に立ち寄った風の神アイオロスの島で、1ヶ月間歓待を受けたことはお話ししました。このアイオロスは、信仰の対象として崇められているというよりは、風の支配者たる神という存在だったと思われます。

他の風の神としては、北東の風の神カイキアス、南東の風の神アペリオテス、北西の風の神スキローン、南西の風の神リプスがあり、東西南北の風神の下位にあるとされています。

ギリシアのアテーナイのローマ時代のアゴラには、「風の塔」と呼ばれている、大理石の塔があります。高さ12m、直径約8mの八角形の塔で、ペンテリコン産の大理石が使われています。八面の壁の上部に、それぞれの風の方角を司る神が浮彫で表されています。かつては、塔の一番高い所に、風によって回る、いわゆる風見鶏のようなトリトーン像があって、風が吹けばその風の向きに該当する風神を指し示していたとされています。

紀元前50年頃に、キュロスのアンドロニコスが建てたとも、紀元前2世紀頃に建てられたとも言われており、流れてくる水で動く水時計があったため、アンドロニコスの時計塔とも呼ばれています。

最後に、船の話を少し。

古代ギリシア初期の頃の船は、古い陶器の壺絵などを見る限り、帆柱に帆を張り、前方に操舵櫂を備え、漕ぎ座は一段の、シンプルな作りだったと思われます。前が迫り上がった、ベネチアのゴンドラのようなシルエットです。

時代が下がるにつれて、船に改良が加えられていきます。紀元前8世紀中頃に、漕ぎ座が二段になった二段櫂船ができ、紀元前6世紀には、三段になった三段櫂船へと改良されていきます。三段櫂船の普及により、ギリシアでは、海上の覇権を争う強力な都市国家の出現を見ます。紀元前480年のサラミスの海戦で、アテーナイ軍がペルシャ軍を破った時も、三段櫂船が大活躍をしました。

紀元前4世紀頃のアテーナイ海軍では、1艘の三段櫂船に170人漕ぎ手が乗っていたとされています。当初、漕ぎ手は、武具を自ら調達できない無産階級の市民でしたが、2万人程度のアテーナイ市民では賄いきれなくなり、次第に、メトイコイと呼ばれる在留外人が中心になっていきました。また、漕ぎ手に奴隷を使っていた都市もありました。

2017年に、黒海を調査していた考古学の研究チーム（黒海海洋考古学プロジェクト）が、黒海の中心近くの水深2,000メートルの海底で、古代ギリシアのものと思われる沈没船を発見したと発表しました。紀元前5世紀頃の交易船と推定されるこの船は、漕ぎ座やマストがそのまま残るなど、極めて保存状態が良いということです。古代へのロマンを感じる、胸がワクワクするようなニュースですね。